
すいーとぱれんたいん ~ WATARU'S SIDE ~

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すいーとばれんたいんぐ WATARU'S SIDE

【Nコード】

N2016F

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

バレンタインデーのチョコレートをめぐって一喜一憂する高木刑事の物語です。原作のイメージと多少異なる点があるかと思いますがご了承ください。

ようやく一段落ついた俺は、コーヒーを買いに廊下へでた。

今日は2月14日。

事件が重なったせいで忙しくて、ともに美和子さんと話もできなかったなあ。

もしかしたらみんなの目を盗んで、俺だけ特別なチョコが貰えるかもって期待してたんだけど。朝イチで貰ったチョコレート、こっそり開けてみたけど、みんなと同じ義理チョコだったもんなあ。

しかも美和子さん、もう帰っちゃったし。

俺は深いため息をつきながら、トボトボと休憩所の自販機に向かう。

ポケットから小銭を取り出し自販機に投入したところで、後ろから来た誰かに声を掛けられた。

「高木！」

肩越しに振り向くと、笑顔の千葉が立っていた。

「なんだ、千葉か。」

「なんだ、はないだろ。冷たい奴だなあ。」

千葉はニコニコしながら、俺の横に立つ。

「あ、俺ホットコーヒー。ミルクと砂糖増量で。」

「誰が奢るって言ったよ？」

俺は少し苦笑しながら言う。

「いいだろ、それくらい。」

千葉は俺の肩をポン、と叩くと、一足先にイスに腰掛ける。

「ったく。しょうがねえなあ。」

俺は二人分のコーヒーを買って、千葉の隣に腰掛ける。

「ほら。ミルクと砂糖、増量しといたぞ。」

カップを差し出すと、

「おお、サンキュー」

と満面の笑顔が帰ってくる。

「ところでさ、どうだったんだよ。」

千葉は興味深々な様子で尋ねる。

「どうって、なにが？」

俺は質問の意図が理解できず、首を傾げた。

「とばけんなよ。貰ったんだろ、佐藤さんから。本命チョコ。」

千葉のウキウキした表情を見て、俺はがっくりと肩を落とし、深くため息をつく。

「ああ、貰ったよ。お前と同じ義理チョコをな。」

「えっ。他に貰わなかったのか？アレ以外に。」

千葉が驚いた顔で俺を見る。

「ああ。朝イチで貰ったアレだけだよ。」

「おかしいなあ。俺、佐藤さんのことだから、みんなの目を盗んでお前に本命チョコを渡してるって思ってたんだけど。」

不思議そうに首を傾げた千葉の言葉を聞いて、俺は苦笑するしかなかった。

「佐藤さん、やっぱり俺に愛想が尽きたのかな。」

ボソツと呟いた俺に、千葉がムキになって言う。

「それはないよ！お前は自分じゃ気付いてないかもしれないけど、佐藤さんはめっちゃめっちゃお前に惚れてるぜ。」

精一杯励ましてくれる千葉に、俺は乾いた笑いを返した。

「そんなことないさ。」

自信喪失の俺には千葉の言葉はただの慰めにしか聞こえなかった。

「そんなことあるから言ってたんだよ。佐藤さんはお前にゾッコンだよ。付き合ってる男が義理チョコ貰ったくらいであんなにヤキモチ妬くんだから。」

千葉は強い口調で俺を諭すように言う。

「ヤキモチって・・・？」

俺の疑問に千葉が答える。

「今日、俺、昼から佐藤さんと聞き込みだったんだけどさ。俺達見

ちゃったんだよ。お前が交通課の女の子達からチヨコ貰ってること。」

「ああ、そういえば。昼飯を済ませて1課に戻ろうとしてるところを呼び止められて。貰ったなあ、チヨコ。」

「そしたらさ。いつもクールな佐藤さんが、一瞬、怒ったような、泣き出しそうな顔してさ。俺、佐藤さんのあんな顔、初めてみたぜ。その後も、現場に着くまで上の空って感じだった。ああ、よっぽどお前のことが好きなんだなって。こっちが妬けちゃったぜ。」

千葉は肩をすくめて苦笑してみせた。

「佐藤さんが、ヤキモチを、ねえ。」

「ああ。あれは絶対そうだよ。お前に惚れてなきゃ、あんな顔しないさ。」

千葉は自信たっぷりに言うと、俺の背中をバシッと叩く。

「しっかりしろよ、高木！自分の気持ちに振り回されて、大切な人の想いまで見失うなよ。まあ、それだけお前が佐藤さんに惚れてるってことなんだろうけど。」

ニヤリと笑ってコーヒーを飲み干した千葉は、俺を残して立ち上がる。

「さあてと。仕事仕事。」

空になった紙コップをゴミ箱に放り込むと、ちらりと俺を振り返る。

「先、行ってるぜ。」

俺はあわててコーヒーを飲み干して立ち上がる。

「千葉！」

俺は遠ざかる後ろ姿に向かって呼び掛けた。

「ありがとな。」

すると、千葉は振り返らずに手をひらひら振りながら答える。

「まあ、焦らずやれよ。」

俺は、千葉を見送ってから、空になった紙コップをゴミ箱に捨て、千葉のおかげで少し軽くなった足取りで、ゆっくり歩き出した。

胸ポケットで携帯が鳴る。

あわてて取り出すと、着信 佐藤美和子の文字。

キヨロキヨロと辺りを見渡し、誰もいないのを確認して、通話ボタンを押す。

「はい、もしもし?」

「あ、涉くん? 私。」

美和子さんの押し殺したような声。

「仕事、もう終わった?」

美和子さんの問いかけに、俺は少しドキドキしながら答える。

「いえ、まだ・・・一段落ついたのはついなんですが、事件の報告書がまだ残ってまして。あと1時間くらいかかるかと。」

「そう。わかったわ。じゃあ頑張ってね。」

それだけ言つと、意外にもあっさりと美和子さんは電話を切つてしまった。

何だったんだ、今の電話? 何か用事があつたんじゃないのか? てつきり仕事が終わつたら会いたい、とか言ってくれると思つたのに。さっきの千葉の言葉で少し軽くなった心が、再び暗く沈んでいくのを俺は感じた。

もしかして、美和子さん、俺が交通課の女の子からチョコを貰ったこと、怒ってるのかな。だから、俺のこと、試してるのかもしれない。だったら、俺の方から会いたいって言えばいいんじゃないか? ちゃんと俺の気持を伝えれば、美和子さんも応えてくれるかもしれないし。

俺が意を決して美和子さんに電話をかけようとしたその時、
くく

また携帯が鳴った。

今度はメールだ。

不審に思いながらメールを開くと、

『涉くんの家に着いたら電話ください。 美和子』

またまたよく分からない美和子さんからのメール。

何で俺ん家に着いたら、なんだ？普通、仕事が終わったなら、じゃないのか？

俺は少しイライラして、くしゃくしゃと頭を掻いた。

ところで今何時だ？

ふと時計を見る。

わ、もうすぐ10時じゃないか。早く報告書を書いて提出しなきゃ、いつまで経っても帰れないぞ。

俺は急いで自分の机に戻り、焦って報告書に取り掛かる。焦っているのに、必要以上に書き間違えたり、文章がおかしくなったりして、結局書きあげるまでに、1時間以上かかってしまった。とりあえず書き上げた報告書を提出すると、俺はあわてて部屋を出る。

くそつ。もう11時半だ。道は混んでないから、家まで15分弱。

美和子さん、家に着いたら電話してって書いてたけど、帰ってからじゃ遅すぎるよな。とりあえず電話だけでも先に・・・

俺は車に乗り込むと、携帯を取り出した。

1回。2回。

呼び出し音が鳴って、美和子さんが出る。

「もしもし。涉くん？」

「あ、美和子さん？俺です。あの、報告書書くのに時間がかっちゃって。それでその、家に着いてからじゃ遅すぎるかと思ったので、先に電話したんですけど。マズかったですか？」

俺は、恐る恐るたずねる。

「馬鹿ね。そんな訳ないじゃない。」

優しい美和子さんの声が電話越しに響く。

「仕事、もう終わったの？」

美和子さんが心配そうにたずねる。

「あ、はい。なんとか終わりました。今から帰るところです。」

美和子さんが怒っていないことに、俺はちよつとホッとして答える。「そう。じゃあ家で待ってて。今から支度して、すぐ行くから。」

美和子さんはさらりと言つと、俺の返事も聞かずに電話を切つてしまった。

混乱する頭を抱えながら、俺はエンジンをかけ、家に向かつて車を走らせた。

この時間だからやっぱり道は空いていて、思ったよりも早く家に着いた。

それでももう11時45分をまわっている。

美和子さん、本当に来るつもりなのかな。

キーケースから家の鍵を取り出し、鍵穴にさしこんだところで、美和子さんが息を切らしてこちらに走つて来るのに気付く。

「み、美和子さん！」

美和子さんは、いつもと変わらない笑顔で俺を見上げると、

「良かった。間に合つて。」

小さな声で呟く。

「あ、俺のせいですよ。こんな遅くに来てもらつてすみません。俺が美和子さん家に行ったら良かったんですけど。」

白い息を吐きながら、肩で息をする美和子さんに、俺は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「いいのよ。私が家で待つててつて言つたんだから。」

美和子さんは小さく首を振る。

「寒いですから、中に入りましょう。俺も今帰つて来たところで、暖房も効いてませんけど。あつたかいコーヒーでも入れますから。」

俺は、美和子さんの細い肩を抱いて促した。

「うん。ありがと。」

美和子さんが頷くのを確認して、俺は少し安堵した。

中へ入り、美和子さんがソファに腰を下ろすのを見て、俺はヤカンを火にかけた。

「ねえ、渉くん。」

不意に美和子さんが呼び掛ける。

「なんですか？美和子さん。」

俺が台所から顔を出すと、美和子さんが手招きするのが見えた。なんだろう。

訳が分からないまま、美和子さんのいるリビングに行くと、美和子さんは俺の手を取ってソファに座らせた。

「涉くんに、渡したいものがあるの。どうしても今日、渡したかったの。」

そう言うと、美和子さんは鞆の中からラッピングされた小さな包みを取り出した。

「初めて作ったから、美味しくないかもしれないけど・・・」
はにかんだ笑顔で差し出す。

「これってもしかして・・・」

びっくりして、手渡された包みと美和子さんの顔を交互に見つめる。
「今日はバレンタインデーでしょ。涉くんは私にとって特別な人だから。帰ってから一生懸命作ったの。」

美和子さんは照れ臭そうに笑う。

「本当は、みんなに配った義理チョコを涉くんに渡すときに、こっそり、仕事が終わってから本命チョコ渡しに行くからねって言うおうと思ってただけど、言いそびれちゃって。」

ごめんね。と美和子さんが申し訳無さそうに謝る。

その姿に、俺は今日一日の自分のことを思いつき反省する。

美和子さんがこんなに俺のことを想ってくれているのに、美和子さんの気持ちを疑ってしまったことが凄く申し訳なくて、俺は正直に美和子さんに伝えた。

「俺、実は、美和子さんから本命チョコ貰えないんじゃないかと思って、その、美和子さんの気持ち、疑ってしまって。すみません。こんなに俺のこと想ってくれてたのに。」

美和子さんはそんな俺をじっと見つめる。

「待っててくれたんだ。」

美和子さんは優しく微笑むと、俺の瞳をじっとのぞきこむ。

「私からの本命チョコ、期待してくれてたんだ。」

「ええ。もちろん。美和子さんは俺にとって、一番大切な人ですから。」

俺は即答した。

美和子さんは、ふふつと笑って言う。

「でも他の子からもチョコ貰ってたくせに。」

俺は、必死になって反論する。

「あ、あれはつ。義理チョコですよ。俺は美和子さんさえ俺のことを想っていてくれたらそれでいいんです！あ、そう言えば・・・」

「そう言えば、何？」

「あ、いえ、何でもありません。俺、コーヒーいれてきます。」

千葉に聞いた話はしないでおう。美和子さんがヤキモチを妬いてたつていう話は。

俺はあわてて立ち上がると、急いで台所に向かう。

リビングでは美和子さんが、

「何よう。私には教えられないって言うの？」

とぶつぶつ文句を言っている。

俺は苦笑しながらコーヒーをいれ、美和子さんに手渡す。

「すっかり遅くなっちゃいましたね。俺がもう少し早く仕事を終わらせてたら良かったんですけど。すみません。」

美和子さんの隣に腰を下ろし、俺は、わざわざバレンタインデーに間に合うようにチョコを届けに来てくれた美和子さんに心から感謝する。

「あら、私は別に構わないわよ。バレンタインデーが終わる前にちゃんと涉くにチョコを渡せたし。それに、今日は泊まってくつもりだから。」

「えっ。」

「お母さんには事件で人手が足りないみたいだから、今日は泊まりになるかもって言って出てきちゃった。」

焦る俺を横目で見ながら、美和子さんはクスリと笑う。

「覚悟しときなさいよ。さっきの続き、絶対吐かせてやるんだから。」

「
そう言うと、美和子さんは俺の頬にそつとキスをした。

（後書き）

初めての投稿です。読みにくいところもあったと思いますが、最後まで読んでくださり有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2016f/>

すいーとばれんたいん～WATARU'S SIDE～

2010年10月11日09時24分発行